
漆黒のエンペラー

青髪ピアス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漆黒のエンペラー

【Nコード】

N9765K

【作者名】

青髪ピアス

【あらすじ】

この世界は魔法と科学がある世界。だが、魔法は特定の場所以外ではつかってはいけないことになっている。

ある日、蓮治は帝抹殺部隊が壊滅したことを知った。蓮治は学校に行き、新たな部隊が作られることを知った。その後、蓮治やその仲間たちに色々なことが・・・

始まりの時(前書き)

頑張っています！

始まりの時

「ぎゃーーーーー！！！」

誰かの叫び声がまた聞こえた。

たぶん、私を含めて生き残っているのは、あと数人だろう。

私たち帝抹殺部隊は間違いなく全滅するだろう。

やはりここには来てはいけなかったんだ。

もう私の魔力も少なくなってきた。

私の話しが聞こえている人は聞いてくれ。

必ず漆黒のエンペラーの・・・下には近づく・・・な。

俺は柊^{ひいらぎ}蓮治^{れんじ}。

昨日の帝抹殺部隊が全滅したことで衝撃を受けている人の一人だ。

俺の両親の清太と菜々美と妹の彩海も俺と同じような反応をしている。

帝抹殺部隊とは、漆黒のエンペラーを探し出し、破壊するためだけに作られた部隊で、この世界に8つある国の中の2つの国の精鋭で組織されている。

一つは蓮治が住んでいる氷の国【アイレイド】でもう一つは音の国【ボイスト】。

帝抹殺部隊が全滅した知らせは、俺の家であったようにテレビを使ってアイレイドとボイストの人々に伝えられた・・・と思う。

（気づいている人もいるだろうが、この世界には魔法と科学が発展している。

魔法のほうが少し発展はしている。

魔法は氷・音・水・火・雷・風・光・闇の属性がある。

それ以外にも、一般的には無属性と呼ばれる魔法も多々ある。

国と属性とその国に住んでいる人の魔法の属性はあまり関係ない。

あと、魔法は特定の場所以外では使ってはいけないことになっている。

問題が起きては困るからだ。

科学はテレビや車、クーラーなど生活に必要なものやパソコンや携

携帯電話など娯楽に使われるものなどがある。）

帝抹殺部隊の話は学校でとても話題になるだろう。

（この世界の学校は魔法の授業と一般的な勉強がある。

その学校の教育方針によって授業の時間が変わっている。）

今、俺は高校一年だ。

今日は4月15日。

俺の誕生日の次の日だ。

とにかく、俺は帝抹殺部隊のことを家族以外と話したい・・・と思い、学校へ自転車で急いで行った。

学校へ行く途中、いつもの通学路であった人が心なしかそわそわしているように思った。

俺は学校から家がそこまで離れてないのですぐ着いた。

『がららららあ』

俺はドアを開けた。

普段ならこの時間に着くと、ほとんど人がいないのだが、クラスの半分以上の人が着いていた。

たぶん、俺と同じ心境なんだろう。

俺はまず席に着き後ろの席の新井あらい 翔しょうに話しかけた。

翔は俺の一番の親友だ。

「今日帝抹殺部隊壊滅って言ってたな。」

「ああ、テレビ見てたらいきなり映像が変わって、ビックリしたよ。

まさか、あんなに強い人たちがな・・・」

俺らの会話はそれだけで終わった。

いつもならどんどん話が進んでいくのに・・・

それほどこの事は衝撃的なのだ。

『がらららあ』

ドアを開けて先生が入ってきた。

先生の名前は成宮なるみや 信二しんじという。

「みんな！知ってると思うが、帝抹殺部隊が壊滅してしまった。

なので、今日は授業ではなく、新たな部隊のための選考会になった。

全国魔術師総会で決まったらしい。

魔法を習ったり使えるものは、全員参加できるそうだ。

まあ、別に強制ではないから参加したいやつだけ参加しろよ。」

全体がそわそわしだした。

少し時間がたって、安部^{あべ} 夏香^{なつか}が言った。

「先生!!」

「なんだ？」

「なんでまた部隊を作るんですか?？」

クラスの大半の奴が軽く頷いた。

「ああ・・・言ってなかったかな。

部隊を新たに作るのではなくて、将来強くなる人を育てていくんだ。」

その言葉を聞いて、俺はなぜかワクワクした。

俺は、いつもの練習で魔力は多いと思っていたが、強さがないからだと思う。

「強くなる・・・。」

「蓮治、なんか言ったか？」

「!!!・・・なんでもありません。」

先生に突っ込まれてしまった。

その時、クラスに少しだけ笑いがおこった。

「ほかになにか言いたいことないか？」

まあ、何かあったら個人的に聞いてこい。

一応、参加できるやつは参加しろよ。

授業もないからな。

じゃあ、出るやつはまたあとでな。」

話が終わり、先生は荷物を持って教室のドアのほうに向かった。

「がららららあ」

先生はそこに出た。

「なあなあ、どうする？」

翔が聞いてきた。

「俺は出ようと思ってる。」

「じゃあ俺も出よっかな！」

「じゃあ俺はでない。」

「ええ!!」

「嘘だよ。」

「なんだ・・・嘘かよ。」

「わりいわりい、まあ試験会場に行こうか!・・・」

俺はあることに気付いた。

「先生さあ・・・試験会場どこかいってないな。」

たぶんクラスのほとんどが気付いたみたいだ。

「蓮治! 追っかけるぞ!!」

翔が言った。

「ああ・・・早くいこう!」

俺はホント先生は間が抜けていると思った。

俺らは急いで職員室まで向かった。

その途中、走っていたら、先生が戻ってきていた。

「そういや、試験会場の場所教えてなかったな。」

場所は気道の間だ。」

気道の間とは魔法の力を高めるための練習場だ。

結構な広さがある。

「じゃあ、みんなに伝えとけよ。」

「はい、わかりました。」

俺らは、同時に言った。

クラスに戻って、俺らは場所を伝えた。

その後、夏香と木戸^{きど} 愛美^{まなみ}が近づいてきた。

ちなみに、夏香も愛美は両方とも結構可愛い。

「二人とも出るでしょ??」

夏香が聞いてきた。

「ああ、出るぞ!」

俺は言った。

「出るからには真剣にやろうね。」

「当たり前だろ! がんばろうな。」

愛美と翔が言った。

「じゃあ気道の間で会おうな。」

俺がそういつて俺と翔は教室の外に出て、気道の間に向かった。

真実

俺たちは気道の間に着いた。

（気道の間は『間』と付いているが、部屋ではなくすごく大きい体育館のようなものだ。

行くには、いったん外に出て少し離れたところを行かないといけない。

気道の間は魔法を使うための場所なので、何か特殊なものでコーティングされているらしい。

いくら高校生になって魔法の制御ができたといえど、リスクが大きすぎるので、法律で20歳以上しか普段の生活では使ってはいけないことになっている。

もちろん、気道の間ではあまりやりすぎないぐらいならしてもいい）
やはり教室を早く出すぎたのか、あまり人は集まってなかった。

「やっぱ早すぎたかな」

翔も同じ気持ちだったらしい。

「少しぶらぶらするか。」

そうだった時だった。

俺らが入ってきたドアから、

「はぁ、はぁ・・・もう来てたのか。」

廊下をさがしても見つからなかったから焦ったぞ。」

「どうしてそんなに急いでるんですか??」

翔が言った。

「校長先生が蓮治に用があるらしいんだ。」

「俺に!?!?なんでなんですか???」

「それは知らない。」

まあ、校長先生が直々に話があるって言うんだから相当なことじゃないのか?」

先生は笑いながら言った。

「まあ、俺は選考会の準備があるから行くな。」

そういつて、先生は外に出た。

「お前何かしたのか??」

「たぶん何にもしてないと思うんだけどな・・・。」

「まあ、言ってこいよ。」

ちょうど夏香たちも来たみたいだし。

諦めて怒られてこい！」

「まだ怒られるって決まったわけじゃないだろう」

もしかした褒められるかもしれない・・・」

「「それはない！」」

翔と夏香と愛美が同時に言った。

「ハモった上に即答かよ・・・」

まあ、俺も褒められるとは思ってないよ。

じゃあ、言ってくるわ。」

そういつて俺は気道の間から出た。

校長室に行く途中は何も考えないように歩いて行った。

その後、すぐ校長室に着いた。

『こん、こん』

俺はドアをたたいた。

「失礼します。」

柊 蓮治です。」

「おお、柊君来たか。」

まあ、そこに座ってくれ。」

俺の通ってる高校の校長先生は男で60歳は間違いなく超えているが、年齢より見た目が若く見える。

名前は吉良 源蔵げんぞうというとても硬派な感じの名前だが、まったく名前のイメージとは逆で、とても優しい人間でとても人が出来ている・・・という感じがした。

「君を呼んだのは、君のためになる話をしたかったからだ。」

実は、この選考会は実は君のために用意されたようなものなのだ。」
それを聞いて俺は凍りついた。

「それはどういうことですか!!」

「それはすぐにわかることだ。」

私が伝えるべきことではない。」

そういつて校長先生は何事もなかったように部屋から出た。

「どういうことだよ・・・」

人を呼んどいてよ・・・」

色々意味を考えたが当然答えは見つからなかった。

少しして、俺は深く考えても意味はないと思い、とりあえず部屋を出て気道の間に向かうことにした。

だが、考えることをやめようとしても、今さっきのことを考えてしまう。

だが、ほかのことなどを色々と考えているうちにすぐに気道の間に着いた。

「ふう・・・なんか色々あったけど頑張るかな！」

俺は心の中でそう誓った。

チーム分け

俺は気道の間に入って行った。

「何の話したんだ!？」

「何かいわれた？」

「どんな話した？」

三人があまり変わらないことを同時に聞いてきた。

言ってきた順番は、翔、夏香、愛美の順だ。

「いや、なんもなかったよ。」

「そうか。」

まあ、お前にもいろいろあるんだろう。

ここは親友として聞かないでやる!!」

翔が言った。

「そうね。」

私たちも聞かないようにするわ。

いいよね? 愛美。」

「むっちゃ気になるけど・・・

私も聞かない！」

翔、夏香、愛美の順で言った。

「お前たち・・・ありがとう!!」

俺は抱きついていきたい気分になったが、さすがにだめだと思いやめた。

「てかさ、せっかく魔法が使えるんだから使おうぜ。」

翔が言った。

「そうね。じゃあ、4人で自分の得意な魔法を見せ合うのはどうかしら?？」

「それいいじゃん。」

じゃあまずは愛美からな。」

「ええ〜〜。」

私からか・・・

何にしようかな・・・

・・・よし!これにしようかな。」

夏香、俺、愛美の順で言った。

「じゃあ・・・行くよ。」

愛美は自分の手と手を合わせ、水の棒を出した。

その後、右手を前に出し、水の玉を出した。

「バットとボールの出来上がり。」

「ホントお前・・・スポーツ好きだな。」

「うん！大好きだよ。」

愛美は笑顔で言った。

「じゃあ次は翔がやれよう。」

俺はそう言った。

「よし、やってやるよ。」

愛美、お前の作ったバットとボールを貸してくれ。」

そういつて、愛美から受け取った。

すると、バットとボールがいきなり電気で包まれた。

「どうだ！！」

「「「どうだって言われても・・・」」」

「なんか地味だ。」

「そうか・・・」

じゃあ、これはどうだ!!」

すると、ボールとバットがいきなり凍ってきた。

しかも、それは電気を帯びたままだ。

「これならどうだぁ!!!!」

「それはすごいと思うぞ。」

俺は正直に答えた。

「私もそう思う。」

「私も。」

夏香、愛美も答えた。

「そうか! やった!!」

翔はうれしそうだ。

「じゃあ、次は夏香がしろよ。」

翔が言った。

「わかったわ。」

すると、ボールとバットが溶けてきた。

夏香の手に炎ができたからだろう。

「どう?？」

「かっこいいな。」

「かっこいいはどうかと思うけど・・・」

まあ、ありがとう!」

「じゃあ、最後は蓮治だな。」

「俺か・・・」

そういつて俺が魔法を使おうとした時・・・

「今から第一次選考会を始める。」

全員組別で一列に並べ!!」

「」

体育の清氏きよし 隆二先生りゅうじが言った。

この人はこの学校で怖いと有名な先生だ。

「よし、全クラス並んだな。」

これから、今回の選考会の説明を始める。

そのためにまずはチームを作ってもらわなければならない。

グループの人数は6人以下で行ってもらおう。

男女3人までだ。

それでは、今から合図を出すまでに作れ!!!」

先生はそう言って外に出た。

「じゃあ、俺らは男女両方2人はいるから、2人つれてきたらいいのか。」

翔が言った。

「そうね。」

じゃあ、私たちは女の子を探してくるわ。」

愛美が言った。

「了解！」

俺らは男を探してくるよ。」

俺は言った。

「じゃあ、見つかったらここに集合ね。」

夏香が言った。

「行ってきまゝす」

そういつて夏香と愛美が探しに行った。

「なあ蓮治、誰か誘いたい奴いる?？」

「俺は別にいないかな。」

翔は?？」

「俺もいない・・・」

どうするか?？」

「あゝ、そういえば竜也がおるじゃん!」

竜也とは明石^{あかし} 竜也^{りゅうや}のことで俺らとよく話している。

「そうだな。」

竜也にしよう!」

「でも、見つけ出すのが大変だな・・・。」

「あいつは背が高いから大丈夫だろ。」

そう言っている間に背が高い理由で見つかった。

「おお！」

竜也がおった。」

「蓮治と翔！！」

どうしたん??」

「いや、俺らのグループに入らないかなって。」

「マジで！」

俺、まだどこにも入ってなかったんだ。

じゃあ、入れてもらうよ。」

竜也は言った。

「よし、頑張っていこうな。」

「「おう！」」

俺の問いに2人は答えた。

「じゃあ、元の場所に戻るか。」

「そうだな。」

そういつて俺たちはもといた場所に戻っていった。

「あ、蓮治たちだ。」

「もゝ、遅いよ!」

夏香、愛美の順で言った。

「ごめんごめん。」

でも、俺らもちゃんと連れてきたわけだから許して。」

俺は軽く手を合わせて言った。

「全然いいよ。」

別に怒ってないし。」

夏香が笑いながら言った。

「まあ、私たちは詩織を連れてきて、蓮治と翔は竜也を連れてきたってことでいいよね?」

「「そうだよ」」

俺と翔は同時に言った。

「このチームで頑張っていこうな!!」

竜也が言った。

「そうね。」

詩織が微笑みながら言った。

ちょうどその時、

「よし、もうそろってるみたいだな。」

それでは、第一次予選のルールを教える。

内容は、魔法の綺麗さをグループ対抗で競い合うのだ。

まあ、自分のお気に入りの魔法をひとつ見せればいいことだ。

それでは、リーダーを決めて、リーダーは俺のところに来い。」

隆二先生は話をやめた。

「誰がリーダーするか？」

俺が言った。

「蓮治がいい。」

「蓮治でよくね？」

「蓮治で決まりっしょ。」

「・・・わかったよ。」

「じゃあ前に行ってくる。」

なぜか俺になり、前に行った。

「何するかわからないけど頑張れよ!」

竜司がそう言って、手を振った。

俺はそれのお返しのために手を振って前に行った。

第一次選考会

俺は先生の下に行って、話を聞いた。

「第一次選考会の内容は、わかってると思うが、魔法の完成度で決まる。

内容を簡単に説明するからちゃんと聞けよ。

まず、誰か一人闇属性か光属性の魔法を使い、ほかはほかの属性の魔法を使ってもらう。

まあ、条件はそれだけだから自由に決めていいぞ。

闇属性と光属性は難しいから大変と思うけどがんばれよ。」

そういつて先生はすぐに外に出た。

「じゃあ、俺も戻るかな。」

俺は独り言を言って5人のいるところに向かった。

「戻ったぞ」

「」「」「あ、お帰り」「」「」

5人が言った。

「で、どうだった?？」

翔が言った。

「特になかったけど、闇属性か光属性の魔法は絶対入れないといけないんだって。」

「それ結構重大じゃん！」

愛美が言った。

「なんで？」

俺が返した。

「だって、私たちの中に闇か光が一番得意な人いないじゃん。」

「あ・・・そうだった。」

「もう、しっかりしてよ、リーダー。」

「すまない。」

「まあいいや。」

じゃあ、誰かしたい人いる??？」

翔が言った。

「・・・」

「いないのか・・・」

「じゃあ、闇属性か光属性使えない人いる？」

夏香と竜司が手を挙げた。

「じゃあ、ほかの人は大丈夫だな。」

翔が言った。

「誰かしよ〜ぜ。」

俺はやってもいいけど、基本的なものしかできないぞ。」

「じゃあ、蓮治か愛美か詩織になるかな。」

竜司が言った。

「やっぱり蓮治しかないか〜。」

翔が言った。

「なんで俺??？」

「だってお前オールマイティーじゃん。」

「オールマイティーって・・・」

褒めてるのか褒めてないのかわからんな。」

「一応褒めてるんだけどな。」

「てか、愛美と詩織はどうなん？」

「私はできないことはないけど得意じゃないかな。」

「私もそんな感じかな。」

愛美と詩織は言った。

「まあ、リーダーでいいんじゃない??」

夏香が言った。

「また俺かよ・・・」

まあ、別に光も闇も苦手じゃないからいいか。」

「マジで!!」

頑張ってくれよ。」

「でも、光と闇どっち使おう・・・。」

「たぶん光のほうがいいんじゃないかな。」

今回は見た目で決まるんでしょ。

なら、光のほうがわかりやすそうだし。」

詩織が言った。

「そうだな、詩織。

サンキュー。」

「いいよ。」

詩織は微笑んだ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9765k/>

漆黒のエンペラー

2010年10月11日10時29分発行